

第 49 話 (28 頁) けちんぼな人としつと深い人

ひとりのお金持ちでけちんぼな人がいました。その人にはお金がたくさんあるのに、まだ足りないのです。けちんぼのとなりには、しつと深い人が住んでいました。しつと深い人は、自分では何もひつようなものはありませんでした。このふたりのところへ魔女がやってきて、こうもうします。

「ほしいものと言ってごらん。のぞみをかなえてあげよう。ただし、たのめるのは、ふたりのうちのひとりだ。そして、ひとりがたのんだことを、もうひとりには、倍にしてかなえてあげよう。」

けちんぼは、こう考えました。

「となりのやつに、たのみごとをさせよう。やつが、ひとざいさんをたのむ、すると、おれには倍になってやってくる。」

しつと深いほうは、こう考えました。

「おれが何をたのんでも、となりには倍になってやってくる。それなら、そうだ、やつの喜ばないことをたのんでやれ。」

そして、しつと深い人は、自分のかたほうの目がつぶれるようにと、たのみました。すると、そのとおりにになりました。しつと深い人はかた目になり、けちんぼは、すっかり目が見えなくなってしまいました。

「何とも陰惨というか、寒々としたストーリーだ。読み終えた途端、教室はしーんと静まりかえって、みんなフリーズしちゃうんじゃないか。」

「登場人物は、けちんぼな人、しつと深い人、それに魔女の 3 人だけ。それぞれの背景や性格の描写がなく、互いの関係もはっきりしない。」

「それだけに 3 人のやったこと、思ったことだけがクローズアップされてくる。実に巧みな書き方だよ。」

「まず魔女。魔法使いの女性、というぐらいの表現だけど、『アーズブカ』ではこれまで出てきた記憶がない。異例の登場だよ。」

「どんな意図があって、姿を現したのかな。突然だし、必然性が感じられない。」

「けちんぼな人、しつと深い人はお隣り同士。だから、互いに顔見知りだけど、それ以上の付き合いやつながりは一切触れられていない。」

「二人ともお金もあって暮らしの不満は何もない。でも、あまりにも対照的だ。けちんぼな人は強欲、しつと深い人は根性の悪いねたみや、といえば少しは分かりやすいかな。」

「けちんぼの考えはすんなり理解できる。自分は 2 倍手に入りたいから、あえて譲って相手に願いごとをさせようというんだから、常識的だよ。」

「ところが、しっとやの願いは想定外だった。幸せではなく不幸を相手に2倍背負わせようとした。自分の片目がつぶれることをかなえてもらうなんて、普通はありえない。」

「しっとやは、本当に目的を達したのかな。それとも、こんな結果は意外だったのかな。」

「やっぱり、自分の意図した通りになったと考えるのが自然じゃないか。」

「だったら、空恐ろしくなるなあ。他人を2倍、不幸にしようというのだから。」

「魔女はこういう結果になるとお見通しだったのか。願いごとをどちらが口にするかも指定していないし…。わざとそう仕向けたんだろうなあ。」

「トルストイは子どもたちに何を伝えたかったのか。」

「自分のこと以上に友達の幸せを願うことの大切さ、他人の不幸を願ったら自分も不幸になることを考えさせたかった…。これじゃ、道徳的すぎるか。」

「魔女が相手にした二人がともにいい人だったら、話はどう展開したかな。」

「互いに、そっちが願いごとを言ってくださいと譲り合う、手にしたものは自分で稼いだのではないから、受け取る筋ではないと断る…。これじゃ、お話は成立しないよ。」

「とすれば、人の不幸を願う人間の業を浮かび上がらせたかったのか。」

「子どもたちには難しすぎるよ。」

「話はいつまでも尽きそうにないから、このへんにしよう。」